

授 業 科 目 の 概 要

(教育学研究科教職リーダー専攻(P))

科目 区分	領域 又は コース	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教育課程の編成及び実施		教育課程編成の課題と実践	<p>教育課程の諸類型、学習指導要領の変遷と社会的背景、教育課程の各領域と領域間の連携、教育課程編成とカリキュラム・マネジメント、学校評価と教育課程、教育課程をめぐる国際的動向等について学修する。</p> <p>到達目標は、教育課程の編成と実施に関わる深い理論的知識を獲得するとともに、実践的力量的基礎を獲得することである。</p> <p>授業中のプレゼンテーション(50%)により主として授業内容への理解度を、期末課題(50%)により理論の実践的応用についての理解度を評価する。</p> <p>(研究者教員 河野庸介) 主に、概要～、など理論面について担当する。</p> <p>(実務家教員 10 岩澤和夫) 主に、概要～など実践面を担当する。</p> <p>上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	ティームティーチング
		カリキュラム開発の課題と実践	<p>カリキュラム開発の諸形態、「特色ある学校づくり」とカリキュラム・マネジメント開発、カリキュラム評価、カリキュラム開発への多様な当事者(保護者、子どもなど)の参加、カリキュラム開発者としての教師、などについて学修する。</p> <p>到達目標は、カリキュラム開発に関わる理論的背景の深い理解と、その実践的応用への視点を獲得することである。</p> <p>授業中のプレゼンテーション(40%)と期末課題(60%)により、理論的知識への理解度と、実践的応用に関わる着眼点の豊かさで評価する。</p> <p>(研究者教員 9 山崎雄介) 主に、カリキュラム開発に関する研究動向など理論面について担当する。</p> <p>(実務家教員 4 清水和夫) 主に、日本の学校現場での事例の分析や地域連携、教育委員会との提携など実践面を担当する。</p> <p>上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	ティームティーチング
教科等の実践的な指導方法		学習支援の課題と実践	<p>児童生徒の学習を支援するための基礎として、思考・判断・記憶等、学習活動を支える認知機能がどのように機能しているのか学修する。また、こうした認知が誤って機能する過程についても学ぶ。その上で、児童生徒の知識の定着、知識の活用、創造的な思考、等を促す教授学習の方法を検討する。</p> <p>到達目標は、(1)学習活動を支える認知機能について正しく理解でき、(2)それに基づいて教育実践を考察する力がついている、ということである。この目標がどの程度達成出来ているかを、平常点(出席・宿題・授業での発表等)と最終レポート(あるいは試験)によって、総合的に評価する。</p> <p>(研究者教員 2 佐藤浩一) 主に、一般的な学習過程や認知過程など理論面について担当する。</p> <p>(実務家教員 11 石川克博) 主に、理論を応用した授業実践のあり方の検討を担当する。</p> <p>上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	ティームティーチング
		教育評価の課題と実践	<p>実践研究に欠かせない教育効果の測定法について、主として理論的な講義を行う。その際、実際の実践活動を行ってきた事例を、実務家教員からも紹介してもらう。その上で、当該事例であれば、どのようなテスト理論、質問紙に関する各種理論、知識が適応でき、必要となるかを講義する。すなわち、課題が実務家教員から呈示された上で、それに対して、理論家の立場からどのような解決が可能かを試案として呈示していくものとする。そして、その試案を、受講者全員で検討して、より高めあっていく形式をとる。ストレートマスターであれば教員採用試験に合格でき、現職教員学生であれば教職の現場に戻ってリーダーとなりうるレベルを到達目標とする。</p> <p>授業の毎回出席はもちろん、ほぼ半分程度のところまで、山口が講義した内容についての知識確認を行う。この知識確認ができていることが前提条件になる。その上で、それ以降での討論の内容を検討することで評価する。最終的に各自が得た知識を基に、現場における教育評価の問題点の改善レポートを求める。そのレポートも評価対象とする。これらの基準は、現場で役立つものという視点と同時に、実証的な観点が備わっているかどうかを重要視する。</p> <p>(研究者教員 6 山口陽弘) 主に、一般的な教育評価の理論面について担当する。</p> <p>(実務家教員 11 石川克博) 主に、理論の実践場面での応用である事例検討を担当する。</p> <p>上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	ティームティーチング
		児童・生徒理解の課題と実践	<p>児童生徒を理解する上での様々な観点や年齢に伴う一般的な発達特性及び児童生徒一人一人の発達特性の両側面からの理解の必要性を事例検討を通して認識する。さらに、そのための基礎知識として、生涯発達の視点から人間の発達過程及び年齢に伴う一般的な発達特性や発達障害について学修する。また、児童相談所心理相談員などの実務経験者を交え、現代の子どものおかれている状況と発達の問題点及びそれへの対応を事例検討を通して、考察する。</p> <p>到達目標は、児童生徒理解のための発達の基礎理論及び一般的な発達特性や発達障害の基礎知識を修得すること。さらに、それらの基礎知識と児童生徒一人一人の発達特性を考慮した児童生徒理解への応用力を修得することである。成績評価は、事例検討会等の授業への参加による平常点(30%)、一般的な発達に関する基礎知識(30%)、期末課題(40%)により評価する。</p> <p>(研究者教員 8 松永あけみ) 主に、一般的な発達過程など理論面について担当する。</p> <p>(実務家教員 角田夏江) 主に、理論の実践場面での応用である事例検討を担当する。</p> <p>上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	ティームティーチング

共通科目	生徒指導及び教育相談	<p>児童・生徒指導の課題と実践</p> <p>児童生徒理解に基づく日常的な生徒指導を効果的に進め、児童生徒一人一人の適応を助けて自己実現を可能にするために必要な理論と技法を学修した上で、不登校、いじめ、非行等の生徒指導上の諸問題に関する事例を通して、実践的な指導力の向上を図る。</p> <p>成績評価は、出席及び授業への参加による平常点30点、理論に関する小テスト30点、理論に基づく生徒指導事例分析レポート40点により評価する。</p> <p>(研究者教員 7 古屋健) 主に、生徒指導の原理・方法に関する講義を担当する。</p> <p>(実務家教員 5 懸川武史) 主に、理論の実践場面での応用である生徒指導事例分析を担当する。</p> <p>上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	ティ・ムティ・チンガ
	教育相談の課題と実践	<p>心理教育相談室において教育相談に関わる準備と教育相談実践への導入を目的とし、一つ一つのケースに理論的かつ実践的にカウンセラーとして関わりながら、教育相談の実際を学ぶ。</p> <p>実際の実習に入る前提として、まず児童・生徒とその保護者の相談にのる上での基本姿勢、来談者の問題の理解、その症状の理解の方法を学ぶ。主訴の理解、生育層の理解、問題層の理解、家族力動の理解、発達的理解、見立ての実際、そしてそれに対するさまざまな対応を文献を通じて学び、かつ受講者が体験した教育現場を振り返り学ぶ。同時に、教育相談の事例研究集を丁寧に読み解き、相談の展開の内実を知ることと勤める。また臨床機関の見学をするともに、インターク面接に出席しその実際を知り、心理教育相談室のカンファレンスにも参加する。そのような基本を学んだ上で7月初旬を目処に、実際の相談者の相談に取り組む。</p> <p>成績評価は授業への取り組みによる平常点が70%、随時与えられるレポート課題が30%による。</p> <p>(研究者教員 猪股剛) 主に、心理臨床的な実践面と理論面を担当する。</p> <p>(実務家教員 関上靖雄) 主に、学校教育場面での実践応用面を担当する。</p> <p>上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	ティ・ムティ・チンガ
	学級経営及び学校経営	<p>特別活動指導の課題と実践</p> <p>特別活動の目標と意義を正しく理解した上で、学級活動の基盤となる教師・児童生徒間及び児童生徒相互の関係の望ましい在り方、児童会・生徒会活動を効果的に進めるための学校体制の整備、学校行事の適切な目標設定と評価について学修する</p> <p>成績評価は、出席及び授業への参加による平常点30点、レポート課題(ケース研究と活動計画案)70点により評価する。</p> <p>(研究者教員 7 古屋健) 主に、目標と活動内容に関する講義を担当する。</p> <p>(実務家教員 5 懸川武史) 主に、特別活動ケース研究を担当する。</p> <p>上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。なお、プレゼンテーションと模擬授業は共同で指導に当たる。</p>	ティ・ムティ・チンガ
	学校経営の課題と実践	<p>国内外の学校経営についての理論的・実践的蓄積を幅広く学ぶとともに、現代日本における学校教育をめぐる諸課題について、具体的な学校経営策を探究・提言する。</p> <p>到達目標は、学校経営についての理論的基礎(組織マネジメント理論、教育法制、職階・分掌と学校経営等)について深い理解を獲得することと、それらと現代日本の学校教育の課題とを架橋する力量を身につけることである。</p> <p>授業中のプレゼンテーション・討論への参加(50%)によって主として理論的課題の理解度を、期末課題(現代の教育課題に関わる学校経営改善策の提案、50%)によって構想力・理論的知識の咀嚼度を評価する。</p> <p>(研究者教員 1 入澤充) 主に、組織マネジメントや危機管理等に関わる学校経営理論など理論的側面を担当する。</p> <p>(実務家教員 4 清水和夫) 主に、学校経営場面での実践的指針など実践的側面を担当する。</p> <p>上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	ティ・ムティ・チンガ
学校教育と教員の在り方	教育環境学	<p>学校や教師に対する様々な批判が渦巻く現状における効果的な教育実践には、学校教育制度が社会的に果たしてきた機能や教師への社会的な役割期待、あるいは教育制度改革や教育指導がもたらす(意図せざる)影響等について多角的に理解しておくことが役立つ。</p> <p>この授業では、教育社会学の理論と様々な調査資料に基づいて学校を取り巻く社会環境の性質を理論的・実証的に把握するとともに、様々な教育問題への対処法について、受講者相互及び教員とのディスカッションを通じて考察する。</p> <p>成績評価は、各回の授業への貢献(出席・課題・発表等)と期末レポートを対象とし、授業で学んだ理論や知識理解に基づきながら、具体的な教育行為の効果や様々な諸問題への対処法について考察できているかとの観点に基づいて行う。</p>	
	教員の倫理	<p>西欧近代に成立し、わが国が近代化のために摂取してきた公教育制度及び教育学は、現在、その理念を根本から問い直さなければならないような未曾有の危機に直面している。社会の急激な変動やそれに伴う国民の意識の変化は、少なからず学校や教員存在を危ういものになっている。現代社会における学校の位置付けを考えるためには、公教育制度やそれを成立させた教育思想が、いかなる理念を持っていたかを学び、それとの比較によって学校を取り巻く社会変動や文化変容の意味を考えなければならない。西欧の教育思想及び公教育制度の成立について概観し、現在の事例研究を通して、従来の公教育制度や教育学の枠組から捉え切れなくなってきた諸問題を明らかにする。具体的には、教員と児童生徒との教育的関係、教員と保護者等との関係を念頭に置きながら、現代社会における学校の役割、教員の社会的役割、教員の社会的・職業的倫理、学校と地域社会との関係等について考察していく。この考察を通して、教員としての自己反省や人生観・世界観を形成することの意義を考える。</p> <p>到達目標は、公教育制度及びそれを成立させた教育学がいかなる理念を持っていたかを理解し、それとの比較によって現代社会における学校や教員の役割を分析し、理解することにある。成績は、平常点(出席・授業での発表等)と期末試験に相当するレポートにより、総合的に評価する。評価基準は、授業での発表やレポートが、到達目標にどの程度達しているかにある。</p>	

多文化共生教育	多文化共生教育の課題と実践	<p>平成2年の入管法改正以降、社会的要請が高まる「多文化共生教育」の社会的・教育的基盤を理解し、課題解決のための構想力を高める。そのために、外国籍児童生徒数増加の社会的背景を知り、地域社会・学校・家庭に与えてきた影響を構造的に理解する。さらに、多文化共生教育のあり方をめぐるさまざまな理論的・実践的研究及び、行政・学校・NPOの具体的な取組をもとに、多文化共生教育のあり方を検討する。</p> <p>到達目標は、多文化共生教育について、その社会的背景とそのアプローチを多角的にとらえる視点の獲得と、その知識を実践に展開する構想力を修得することにある。</p> <p>成績評価は、平常点（出席・授業での発表等）と、期末課題（1. 多文化学級の映像を視聴し、その現象の社会的・教育的背景を考察し、教育課題を抽出する。2. その教育課題解決のための教育プランの考案60%）により評価する。</p> <p>（研究者教員 結城恵） 主に、多文化社会の現状と多文化共生教育に関する理論や研究動向について担当する。</p> <p>（実務家教員 12 石田成人） 主に、理論の実践場面での応用である多文化共生教育実践の事例分析と実践構想に関するファシリテーターを担当する。 上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	ティムティーナグ
	多工スニシティ化社会の教育の課題と実践	<p>外国籍児童生徒の教育を、学校現場における種々の問題を、教師として勤務した場合、管理職として勤務した場合などの複合的な視点から取り上げる。具体的には、言語習得と保持を促す様々な方法、文化的な衝突（マニキュア、ピアスなどの問題）、進学などの進路指導、保護者との関係構築の問題、宗教的配慮、偏見と差別の問題などを事例とする。現場における論争的な問題に対して、多文化共生、多文化主義、文化的多元主義などの観点から適切な回答を出せることが合格要件である。客観的な表現、あるいは明瞭な概念をもって回答することで、評価が向上する。</p> <p>（研究者教員 3 所澤潤） 主に、一般的な多文化共生、多文化主義、文化的多元主義など理論面あるいは就学の権利義務などの法的側面からの事例検討を担当する。</p> <p>（実務家教員 12 石田成人） 主に、行政や学校の現実からの事例検討を担当する。 なお、両者はそれぞれの観点から実践及び授業技術の解釈を示し、学生の経験も加えて討論を行い、両者は、必要に応じて互いに補う。</p>	ティムティーナグ
学習支援に関する分野	学習支援の課題と実践	<p>「学習支援の課題と実践」を基礎として、児童生徒の思考・判断・記憶過程等に関する深い理解に基づいて、(1)様々な教授学習方法の有効性を批判的に検討するとともに、(2)より有効な学習支援の方法を検討し、(3)その効果を実践的・実証的に検証することを目指す。授業は学部新卒学生と現職教員学生が合同で参加する。このことにより、学部新卒学生は現職教員の経験から学ぶことが可能になり、また現職教員学生は新卒学生から提示される意見等を通して自らの教育実践を省察する機会が得られる。</p> <p>到達目標は、(1)様々な教授学習方法の有効性を批判的に検討でき、(2)より効果的な学習支援方法を実践的・実証的に構築する力がついている、ということである。この目標がどの程度達成出来ているかを、平常点(出席・宿題・授業での発表等)と最終課題によって、総合的に評価する。</p> <p>（研究者教員 2 佐藤浩一） 主に、教授学習方法の有効性を検討するための理論的な枠組みを担当する。</p> <p>（実務家教員 11 石川克博） 主に、理論的枠組みを利用した、学習効果の有効性検証のための方法論の検討を担当する。 上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	ティムティーナグ
	教育評価の課題と実践	<p>教育評価の課題と実践 で獲得した知識を基にして、実際にノルム準拠テスト、基準準拠テストを作成してみる。受講者各自が自分の興味関心に応じて質問紙、テストをできるようにすることを授業の目標にする。学部新卒学生であれば教員採用試験に合格できることはもちろん、現職教員学生であれば教職の現場に戻ってリーダーとなりうるレベルである。ここで学部新卒学生と現職教員学生を混合させて授業を行う理由は、より現職教員の抱える実践的な問題を、早く学部新卒学生に認識してもらうためであり、授業内容も、一方的な講義は全く想定していない。むしろ、研究者教員、実務家教員、現職教員学生、学部新卒学生が一緒になって、同じ問題を解決していくものとなる。こうすることで、現場の問題を学部新卒学生もより認識できるものとなる。</p> <p>授業の毎回出席はもちろん、課題への全体的な取り組みの姿勢を評価対象とする。特に、質問紙法を実際に習得している点を確認するため、作成された質問紙が評価対象となる。さらに最終的な教育評価の問題点の改善レポートを求める。そのレポートも評価対象とする。</p> <p>（研究者教員 6 山口陽弘） 主に、一般的な教育評価の理論面について担当する。</p> <p>（実務家教員 11 石川克博） 主に、理論の実践場面での応用である事例検討を担当する。 上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	ティムティーナグ
	授業分析実践	<p>現在の日本で行われている優れた授業では、どのような技法が使われているかをビデオなどを通して分析するとともに、本講義の受講者なら各場面でのどのような対応をするかを予想させ、実際の授業での展開とどのような違いがあるかを確認し、授業を行う楽しみを再確認させ、自分が行ってきた授業の水準を理解する。受講者自身の行った授業をビデオによって分析し、授業者自身の授業技術の改善を図るとともに、他者の授業に対する助言の仕方を学ぶ。自分が行ってきた授業がどの水準にあったかということ、主観的にディスカッションの場で語れることが合格の要件である。主観的にばかりでなく、客観性を以て、あるいは概念の明瞭性をもって他者に語れることが良い評価を得ることにつながる。</p> <p>（研究者教員 3 所澤潤） 主に、教育方法論、技術論、また他の実践家の事例などの観点から授業及びその技術の解釈を担当する。</p> <p>（実務家教員 11 石川克博） 主に、自身の実践の経験などから授業及びその技術の解釈を担当する。 上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	ティムティーナグ

コ ー ス 別 科 目 （ 児 童 生 徒 支 援 コ ー ス	生活支援に関する分野	児童・生徒理解の課題と実践	<p>児童生徒理解のための一つの方法である観察法を学ぶ。さらに、附属学校や連携協力校で参与観察及び非参与観察を実施し、それらの観察データを分析・解釈し、その後の子どもへの対応を考察する。これらの基礎知識と実践を通して、行動観察による児童生徒理解の方法を修得する。その際、学部新卒学生と現職教員学生のそれぞれの立場からの意見交換により、多面的な子ども理解が可能になるよう図る。</p> <p>到達目標は、学校現場において児童生徒理解のために様々な観察法を活用できる力を修得することである。成績評価は観察データによる事例検討会などの授業への参加による平常点（50%）、観察事例作成分析等の期末課題（50%）により総合的に評価する。</p> <p>（研究者教員 8 松永あけみ） 主に、観察法やデータの分析法などの実践的理論面を担当する。 （実務家教員 角田夏江） 主に、データの解釈やその後の対応についての提案などを担当する。 上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	ティームティーチング
		児童・生徒指導の課題と実践	<p>非行、校内暴力、不登校、いじめ等、生徒指導上の諸問題について、共通する問題状況に関する理論を学修した上で、個別の問題に有効な要因について分析し、その理解と指導法について学修する。</p> <p>成績評価は、出席及び授業への参加による平常点30点、個別テーマに関する調査・研究報告50点、事例報告20点により評価する。</p>	
		教育相談の課題と実践	<p>心理教育相談室において教育相談を実践し、一つ一つのケースに継続的にカウンセラーとして関わりながら、教育相談の実践を学ぶ。</p> <p>「教育相談の課題と実践」において学んだ基本的な教育相談技能を前提として、心理教育相談の技能を高めていく。毎回の教育相談のスーパーヴィジョンを受けながら、主訴の理解や見立ての必要性、心理力動の理解・家族力動の理解・心身問題の理解を深めていく。同時に相談の内実に沿って、医療・福祉・司法との連携の取り方も実践的に学んでいく。また、相談記録のとり方・ケースカンファレンスのための資料作り・事例研究の書き方についても学習する。成績は相談の実践とスーパーヴィジョンおよびケースカンファレンスでの事例検討を70点とし、学期末の事例研究を30点とし評価する。</p> <p>（研究者教員 猪股剛） 主に、心理臨床的な実践面と理論面を担当する。 （実務家教員 関上靖雄） 主に、学校教育場面での実践応用面を担当する。 上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	ティームティーチング
		教育相談実習	<p>実習校や関係教育相談機関において、教師として教育相談に臨み、教育相談の実践を通じて教育現場に即した教育相談の課題と実践を学ぶ。</p> <p>「教育相談の課題と実践」を履修し、その基礎的な理論と実践を学んだものを対象とし、心理教育相談室などの専門相談機関への来所相談とは異なる学校内での教育相談の在り方を学ぶ。その際、本人との相談以外に、1.校内連携の在り方、2.家庭との連絡や相談の在り方、3.専門相談機関との連携の在り方、4.年度を越えた縦断的なサポートの在り方など学校現場に特に必要とされる教育相談の実践を、一つ一つの事例に即して学び、現場に合った相談を実践する。</p> <p>成績は、平常の実習への取り組みと事例記録とスーパーヴィジョンを70点とし、学期末の事例研究を30点とし評価する。</p> <p>（研究者教員 猪股剛） 主に、心理臨床的な実践面と理論面を担当する。 （実務家教員 5 懸川武史） 主に、学校教育場面での実践応用面を担当する。 上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	ティームティーチング
		特別活動指導の課題と実践	<p>特別活動、特に学級経営・生徒指導の基盤となる学級活動の進め方について、多様な指導方法の種類とその特徴について理解し、有効な目標設定・教師の支援・教育効果の評価のための技能の向上を目指す。特別活動で要求される教師のリーダーシップ技能訓練を含む。模擬授業及び技能訓練を実施するため現職教員と学部新卒学生が一緒に受講する。</p> <p>成績は出席及び討議・訓練への参加による平常点30点と、レポート課題（授業案の作成）70点により総合的に評価する。</p> <p>（研究者教員 7 古屋健） 主に、学級活動指導方法に関する講義を担当する。 （実務家教員 5 懸川武史） 主に、リーダーシップ訓練を担当する。 上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。なお、後半のケース研究とプレゼンは共同で指導に当たる。</p>	ティームティーチング
		心理・発達アセスメント実習	<p>児童生徒理解のための心理検査、発達検査及び知能検査等の実施法と解釈の仕方を学び、実施し、その結果に基づいた指導プログラムの立案方法を学ぶ。</p> <p>到達目標は、心理検査、発達検査、知能検査等を実施できるようになること、検査結果に基づき、解釈し、指導プログラムを立てることができるようになることである。成績は、平常点とレポートにより総合的に評価する。レポートは、テーマ毎に課せられ、実施、解釈、指導プログラムの三つの観点から評価する。</p> <p>（研究者教員 7 古屋健） 心理検査とその解釈と指導プログラムについて担当する。 （研究者教員 8 松永あけみ） 発達検査及び知能検査とその解釈と指導プログラムについて担当する。 上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	ティームティーチング

	<p>児童・生徒指導のためのロールプレイの技法と実習</p>	<p>児童・生徒指導、保護者への対応、職場での問題点などへの対処法を、受講生に生徒役、教師役、保護者役などを割り振り、ロールプレイを行うことで、実際に指導力向上に役立てる。学部新卒学生であれば教員採用試験に合格できることはもちろん、現職教員学生であれば教職の現場に戻ってリーダーとなりうるレベルである。ここで学部新卒学生と現職教員学生とを混合させて授業を行う理由は、現職教員の抱える実践的な問題を、早く学部新卒学生に認識してもらうためであり、授業内容も、一方的な講義は全く想定していない。むしろ、研究者教員、実務家教員、現職教員学生、学部新卒学生が一緒になって、同じ問題を解決していくものとなる。</p> <p>授業の毎回出席はもちろん、課題への全体的な取り組みの姿勢、最終的なロールプレイへの事前・事後における、受講者自身の自己報告による改善レポートを求める。そのレポートも評価対象とする。</p> <p>(研究者教員 2 佐藤浩一・6 山口陽弘)</p> <p>主に、ロールプレイを行う際の、モレノらの展開した理論的な背景についての解説を担当する。</p> <p>(実務家教員 5 懸川武史)</p> <p>主に、ロールプレイを行う際の実践場面での児童、保護者等の事例提供・検討を担当する。</p> <p>上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	<p>ティムティーナグ</p>
<p>特別支援に関する分野</p>	<p>外国籍児童特別支援教育の課題と実践</p>	<p>外国籍児童生徒の数多く在籍する学校で、外国籍児童生徒にどのような支援を与えたらよいか、という問題を検討する。外国籍児童生徒には、日本語習得と母語の保持、異文化接触など、特別支援を必要とする問題があり、実践を通してどのように対応するかを具体的に検討する。受講者は実践にふれて見つけ出した教育上の課題を提示し、自分自身の対応方法を、言語習得、多文化主義、文化的多元主義などの観点から語れることが合格の要件である。自分自身の対応方法(妥当な対応方法であるという前提で)に、自分自身の実践歴が反映されれば反映されるほど、また独自性が高ければ高いほど評価は高くなる。</p> <p>(研究者教員 3 所澤潤)</p> <p>主に、一般的な多文化共生、多文化主義、文化的多元主義など理論面、あるいは言語習得やバイリンガル教育の理論面について担当する。</p> <p>(実務家教員 12 石田成人)</p> <p>主に、理論の実践場面での応用である事例検討を担当する。</p> <p>上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、両者はそれぞれの観点から実践及び授業技術の解釈を示し、学生の経験も加えて討論を行い、必要に応じて互いに補う。</p>	<p>ティムティーナグ</p>
	<p>発達障害児特別支援教育の課題と実践</p>	<p>特別支援教育の対象児の中でも、小・中学校の通常学級に在籍する児童生徒に焦点を当て、個々の子どもの実態の把握、それに基づく個別の学習支援計画の立案及び支援の方法について、実践事例を交えて具体的に学ぶ。</p> <p>この授業を通して、特別な教育ニーズを把握して個別の教育計画を立てる力、各種の支援方法及び特別支援教育コーディネーターの役割と実際についての専門的知識が身に付く。</p> <p>評価は、出席及び授業への参加による平常点(30%)、学修した知識を用いて作成する個別の学習教育計画案の内容とプレゼンテーション(70%)を総合して行う。</p> <p>(研究者教員 松田直)</p> <p>主に、子どもの障害特性や学習支援に関して一般的に指摘されている事項についての紹介を担当する。</p> <p>(実務家教員 角田夏江)</p> <p>主に、事例提供と事例検討を担当する。</p> <p>上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、両者はそれぞれの観点から事例等に対してコメントし、必要に応じて互いに補う。</p>	<p>ティムティーナグ</p>
<p>実践研究に関する分野</p>	<p>教育実践のリフレクション</p>	<p>受講者が各自の実習校や勤務校での教育実践を持ち寄り、自己の教育実践のリフレクションを行い、相互に交流することを通じて教育実践の力量を高める。</p> <p>到達目標は、自らの教育実践のあり方を振り返る力量を形成すること、リフレクションの結果を他者に向けてわかりやすく発信し、交流する力量を形成すること、それらを通じて教育実践力を高めることである。授業中の発表や討論への参加状況により、リフレクションの深さ(60%)とコミュニケーションの技量(40%)を評価する。</p> <p>(研究者教員 2 佐藤・6 山口)</p> <p>リフレクションの進め方、及び、学習指導に関する受講者の発表の際、ファシリテーターを務める。</p> <p>(研究者教員 7 古屋・8 松永)</p> <p>リフレクションの進め方、及び、生徒指導に関する受講者の発表の際、ファシリテーターを務める。</p> <p>(実務家教員 5 懸川)</p> <p>生徒指導に関する受講者の発表の際、ファシリテーターを務める。</p>	<p>ティムティーナグ</p>
<p>課題研究に関する分野</p>	<p>児童生徒支援課題研究</p>	<p>実習を通じて、児童生徒の学習や生活支援に関する課題を受講生らが明確にし、その課題解決のための計画立案、実践を行い、研究実践報告書としてまとめ発表する。本授業は、実習との往還により授業を進める。</p> <p>到達目標は、課題を発見し、課題の分析、課題解決のための対応策の立案、実践、省察、他者へのプレゼンテーションといった学校現場の課題解決に向けた高度な一連の諸能力と技能を修得することである。成績は、研究実践報告書(60%)及び発表(40%)を総合的に評価する。受講者毎に、受講者の課題テーマを専門とする研究者教員と実務家教員が各1名ずつペアになり指導にあたる。</p> <p>(研究者教員 2 佐藤浩一・6 山口陽弘・7 古屋健・8 松永あけみ)</p> <p>(実務家教員 5 懸川武史・11 石川克博)</p>	<p>ティムティーナグ</p>
<p>教育課程編成に関する分野</p>	<p>カリキュラム開発の課題と実践</p>	<p>受講者が自ら、附属学校や協力校、現職教員の在籍校、あるいはその他先進校などにおいてカリキュラム開発事例を収集・分析し、その結果を生かしながら自身で特定領域・科目のカリキュラムの概要を提案する。</p> <p>到達目標は、学校現場でのカリキュラム開発をリードする力量を獲得することである。</p> <p>授業中のプレゼンテーション(50%)により主として情報収集力、分析力を、期末課題(具体的なカリキュラムの概要の提案、50%)により主としてカリキュラム開発に関わる実践的力(当該領域への理解度、構想力など)を評価する。他の実習校におけるカリキュラム開発事例の収集・検討を行う。</p> <p>(研究者教員 9 山崎雄介)</p> <p>主に、研究方法論などの理論面を担当する。</p> <p>(実務家教員 4 清水和夫)</p> <p>主に、フィールドワーク結果のコメントなど実践面を担当する。</p> <p>なお、上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	<p>ティムティーナグ</p>

コ ス 別 科 目 （ 学 校 運 営 コ ス ）	学校経営に関する分野	学校経営の課題と実践	<p>学校内外の組織づくり、管理職 主任等ミドルリーダー層、ミドルリーダー層 教職員等の連携の円滑化などについて、具体的な学校経営上の判断が要請される場面（教育課程編成、危機管理体制の構築、クレーム・トラブルへの対応等）を想定したワークショップ等を取り入れ、実践的力量を向上させる。</p> <p>到達目標は、校内での職務に応じ、学校経営に的確に参画できる力量を向上させること、管理職としてのリーダー行動を身につけることである。</p> <p>授業中の諸課題（ワークショップ、ロールプレイ等、50%）及び期末課題（学校経営方針への自身の参画方針の立案、50%）により評価する。</p> <p>（研究者教員 1 入澤充）</p> <p>主に、学校経営に関わる理論や法制などを担当する。</p> <p>（実務家教員 4 清水和夫）</p> <p>主に、ワークショップのファシリテーターなど実践面を担当する。</p> <p>なお、上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	ティムティーチング
		学校経営計画ワークショップ	<p>学校経営計画立案に関わる理論的学習、及び、受講者各自が学校経営計画の立案をワークショップ形式で行う。</p> <p>到達目標は、学校経営計画立案に関わる校内での検討をリードできる理論的知識と実践力量の獲得である。</p> <p>授業でのプレゼンテーションや討論への参加状況を通じ、企画力、構想力、指導力を評価する。</p>	
	スクール・リーダーシップの課題と実践	<p>各種主任、校務分掌の長、管理職など、学校におけるミドルクラス以上のリーダーの役割と実践力量について、先進事例や外国研究を通して学ぶ。</p> <p>到達目標は、ミドルクラス以上のリーダーについての理論的・実践的知識を獲得すること、受講者自身がリーダーシップ行動をとれるようになることである。</p> <p>授業中の諸課題（リーダーシップ行動に関わるロールプレイ、アクティヴティなど50%）により実践的力量を、期末課題（めざすべきリーダー像についての小論文、50%）により主として理論的背景への理解度を評価する。</p> <p>（研究者教員 9 山崎雄介）</p> <p>主に、リーダー行動の理論や諸外国の研究動向など理論面について担当する。</p> <p>（実務家教員 10 岩澤和夫）</p> <p>主に、理論の実践場面での応用である事例検討やロールプレイ等のファシリテーターを担当する。</p> <p>なお、上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	ティムティーチング	
	教師の職能発達と学校経営	<p>校内研修や日常的な授業改善など、学校を舞台とした教師の資質向上策について、先進事例や外国研究から学ぶ。</p> <p>到達目標は、力量・資質のそれぞれに応じた向上策について、豊富な事例とその理論的背景を理解することである。</p> <p>授業でのプレゼンテーション（40%）により情報収集力と理論的背景の理解度を、期末課題（受講者が選択した資質・能力についての研修計画・向上策の策定、60%）により構想力・企画力を評価する。</p> <p>（研究者教員 9 山崎雄介）</p> <p>主に、教師の力量形成や学校文化についての理論的側面を担当する。</p> <p>（実務家教員 4 清水和夫）</p> <p>主に、具体的な研修事例の検討や研修計画策定など実践的側面を担当する。</p> <p>なお、上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	ティムティーチング	
	多文化共生教育の理論と実践フィールドワーク	<p>多文化状況にある学校教育現場で「多文化共生教育」を構想し展開する力を、学校教育現場での体験的学習をもとに構想し、実践する力を養う。</p> <p>具体的には、多文化状況に学校教育現場で起こる現象を理解するために求められる着眼点と解釈を探求する。</p> <p>さらに、現職教員と共に、課題解決を図る多文化共生教育実践を、構想・実践・評価・展開する。成績評価は、教育現場での現象への分析力・理解力、実践を構築するために求められるコミュニケーション力・構想力・反省力・展開力の、6つの観点から、学校教育現場の参与・構想・実践・考察の過程を評価する。</p> <p>（研究者教員 結城恵）</p> <p>主に、多文化共生教育及びフィールドワークの理論や研究動向について担当する。</p> <p>（実務家教員 12 石田成人）</p> <p>主に、理論の実践場面での応用であるフィールドワーク及び教育実践の構想に関するファシリテーターを担当する。</p> <p>なお、上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	ティムティーチング	
学校評価に関する分野	学校評価の課題と実践	<p>学校教育に関わる各当事者のニーズのアセスメントやそれを踏まえた経営改善に資する評価の方法論について、先進事例を通じて研究する。</p> <p>到達目標は、学校の自己評価、外部評価に関わる理論的背景の理解と、方法論的知識の獲得である。</p> <p>授業中のプレゼンテーション（40%）、期末課題（学校評価に関わる国内あるいは外国の事例を取り上げた分析、60%）の双方から理解度、構成力を評価する。</p> <p>（研究者教員 9 山崎雄介）</p> <p>主に、学校評価についての研究成果や諸外国の動向など理論的側面を担当する。</p> <p>（実務家教員 4 清水和夫）</p> <p>主に、評価ファーマットの開発の指導など実践的側面を担当する。</p> <p>なお、上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	ティムティーチング	
コ ス ）	コソリット・マネジメントに関する分野	学校危機管理体制構築の課題と実践	<p>学校の危機管理体制の構築について、現実起きた事故のケース・スタディを交えつつ、先進事例の分析と附属校、協力校、現職院生の在籍校、警察、消防等関係諸機関におけるフィールドワークの往還によって学ぶ。</p> <p>到達目標は、学校の危機管理に関わる最新の理論的・実践的蓄積に精通することと、それを具体的な学校の危機管理体制構築に適用できるようになることである。</p> <p>授業でのプレゼンテーション（50%）により理論・事例への理解度を、期末課題（危機管理体制構築に関わる提案、50%）により実践的力量・企画力を評価する。</p> <p>（研究者教員 1 入澤充）</p> <p>主に、危機管理体制についての国内外の動向や法制など理論的側面を担当する。</p> <p>（実務家教員 10 岩澤和夫）</p> <p>主に、事例の紹介やフィールドワーク結果へのコメントと期末課題作成の支援など実践的側面を担当する。</p> <p>なお、上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	ティムティーチング

	教育行政に関する分野	地方教育行政の課題と実践	<p>地方教育行政をめぐる法制と実践上の諸課題について、近年の教育改革との関わりで理解を深める。</p> <p>到達目標は、教員・管理職として、また指導主事等の行政職としての勤務にあたり求められる知識・理解を獲得することである。授業中のプレゼンテーション・討論への参加（50%）と期末課題（勤務校の所在地の教育行政の分析と改革課題の析出、50%）で授業内容への理解度を評価する。</p>	
	実践研究に関する分野	学校経営のリフレクション	<p>近年、教育実践の場でも積極的に導入されている「リフレクション」という手法を学校経営に応用し、受講者各自の勤務校における学校経営への参画状況へのリフレクションを行い、相互に交流することを通じて実践力量を高める。</p> <p>到達目標は、自らの学校経営への参画状況を多様な視点から振り返る力量を形成すること、リフレクションの結果を他者に向けてわかりやすく発信し、交流する力量を形成することである。授業中の発表や討論への参加状況により、リフレクションの深さ（60%）とコミュニケーションの技量（40%）を評価する。</p> <p>（研究者教員 1 入澤充、3 所澤潤、9 山崎雄介、豊泉清浩、荒牧草平）</p> <p>主に、リフレクションの方法論や国内外での研究動向など理論面について担当する。（実務家教員 4 清水和夫）</p> <p>主に、受講者によるリフレクションのファシリテーターを担当する。</p> <p>なお、上記のように主担当は決まっているが、共同授業ゆえ、必要に応じて互いに補う。</p>	ティムティーナク
	課題研究に関する分野	学校運営課題研究	<p>実習を通じて、児童生徒の学習や生活支援に関する課題を受講生らが明確にし、その課題解決のための計画立案、実践を行い、研究実践報告書としてまとめ発表する。</p> <p>本授業は、実習との往還により授業を進める。</p> <p>到達目標は、課題を発見し、課題の分析、課題解決のための対応策の立案、実践、省察、他者へのプレゼンテーションといった学校現場の課題解決に向けた高度な一連の諸能力と技能を修得することである。成績は、研究実践報告書（60%）及び発表（40%）を総合的に評価する。受講者毎に、受講者の課題テーマを専門とする研究者教員と実務家教員が各1名ずつペアになり指導にあたる。</p> <p>（研究者教員 1 入澤充、3 所澤潤、9 山崎雄介）</p> <p>（実務家教員 4 清水和夫、10 岩澤和夫、12 石田成人）</p>	ティムティーナク
学 校 に お け る 実 習 科 目	課題研究実習	課題発見実習	<p>附属小・中・特別支援・幼稚園の4校園を各2日ずつ訪問観察し、校種を越えた学校教育全体の構造とつながりの理解及び3～18歳までの健常児と障害児の発達を理解する。指導教員は、実習校に向向き、観察オリエンテーション及び事後検討会に出席し、実習校教員とともに指導にあたる。</p> <p>到達目標は、児童生徒の発達理解と学校教育の全体構造とを関連づけた深い理解を修得することである。成績は、実習録及び実習時や事後検討会での取り組みにより総合的に判断し、実習校指導教員と大学院指導教員が協議の上、評価する。</p> <p>各校種に精通する教員が校種ごとに担当する。（附属小；4 清水和夫、附属中；5 懸川武史、附属特別支援；松田直、附属幼稚園；8 松永あけみ）</p>	ティムティーナク
		課題発見実習	<p>2～3名からなる実習班を編成し、実習班ごとに附属学校及び連携協力校3校において、各以下の三点を行う。</p> <p>a. 学校の全体的概要やカリキュラムの特性と構成などの教務事項を把握する。</p> <p>b. 授業、部活動等の課外活動、生徒指導等学校教育活動の全体の観察・理解、及び、生徒個人観察、学級全体観察を行う。</p> <p>c. 授業等補助など実践に参加する。</p> <p>現職教員学生は、勤務校以外の学校での観察・参加を通して、自らの実践を省み、課題を明確化する。</p> <p>学部新卒学生は、観察・参加を通して、自己の知識・技能等の弱点を知るとともに、課題を発見し、明確化する。</p> <p>到達目標は、受講者が各自の課題を明確にすることである。成績は、実習録及び実習時や事後指導時での取り組みにより総合的に判断し、実習校指導教員と大学院指導教員が協議の上、評価する。</p> <p>実習班毎に1名の指導教員が担当する。</p> <p>・6実習班を編成予定（研究者教員：1 入澤充、2 佐藤浩一、3 所澤潤、6 山口陽弘、実務家教員：4 清水和夫、5 懸川武史が担当）</p> <p>なお、6以上の実習班が編成された場合には、研究者教員（古屋健、松永あけみ、山崎雄介）が担当する。</p>	ティムティーナク
		課題解決実習	<p>実習生各自が課題解決のための企画・立案を実習開始時に行い、その実践に向けて計画的に実習する。それゆえ、実習の具体的な内容は、学生の課題テーマにより個別に計画していく必要があるが、a. 教科等の指導、b. 学級経営、c. 児童生徒指導の実践を必ず含める。また、特に、学校全体の教育活動や運営に関するテーマなどでは、実習開始時に実習校における年間教育計画に組み込み、学校での教育活動における位置づけを明確にする必要がある。さらに、実習期間中も授業「課題研究」を併行して行い、指導教員の指導を受ける。</p> <p>到達目標は、自らの課題解決に向けた実践の実施と省察の態度形成である。成績は、実習録及び実習時や実践検討会での取り組みにより総合的に判断し、実習校指導教員と大学院指導教員が協議の上、評価する。</p> <p>各受講者の課題研究の指導教員（研究者教員と実務家教員の各1名）が指導にあたる。</p>	ティムティーナク